

冬の公民館講座

- ① 芦屋の歴史 学芸員と探る芦屋の歴史〈全3回〉
令和5年1月30日・2月27日・3月27日（月）
午後2時～
- ② 近現代文学講座 関西文学に育まれた文学〈全3回〉
令和5年1月28日・2月25日・3月25日（土）
午前10時～
- ③ 時空を旅する 徳川家康と彼の生きた時代〈全3回〉
令和5年1月12日・2月9日・3月9日（木）
午前10時15分～

- ④ 日本美術史講座 日本美術の魅力2：近代の美術
1～「明治の浮世絵」〈全3回〉 令和5年1月28
日・2月25日・3月25日（土） 午後2時～
- ⑤ 経済学講座 変わりゆく世界経済と日本経済・
日本企業の行方〈全3回〉 令和5年1月23日
（月）・2月6日（月）・3月2日（木） 午後2時～



■会場 市民センター 401 室
■定員 90 人
■費用 全3回 1,500 円

■申し込み 12月12日（月）
までに講座名・住所・氏名・電
話番号を記入し、はがき・公民
館備付け用紙で下記へ

問い合わせ 公民館 ☎ 35-0700 (〒 659-0068 業平町 8-24)

あしや芸術さんぽ Vol.5

【美術博物館休館のご案内】7月1日～令和5年3月末(予定)は
改修工事のため休館。今後の休館中の活動や工事後の再開館の
スケジュールなどについては、随時ホームページでお知らせしま
す。再開館予定は、令和5年4月上旬です。

美術博物館が休館の期間、芸術家達が切り取った芦屋と現在の風景
を紹介するコラムを連載します。



小出 権重《芦屋風景(仏教会館)》1927年頃 鉛筆、紙 芦屋市立美術博物館蔵

芦屋仏教会館を北側から臨んだ光景です。建築家・片岡安の設計に
より1927年に完成した本館は、鉄筋コンクリート造りの近代建築に仏
教の東洋的意匠がミックスされ、国登録有形文化財となっています。
会館の手前には、1874年に大阪・神戸間に開通した国鉄(現在のJR東
海道本線)が左右に走り、左手の橋は芦屋川の下に国鉄を通すために
作られた芦屋川トンネルです。芦屋は明治から大正にかけ鉄道網が整
備されたことで、都市で働く人々の理想的な居住地として発展し、多く
の文化人や芸術家もこの地に集いました。本作の作者である小出権重
(1887-1931)もまさにこの時代に芦屋へやってきた洋画家です。

大阪の老舗菜問屋に生まれた権重は、東京美術学校(現在の東京
藝術大学)で洋画を学び、二科会で活躍するようになります。1921年
から約半年間のヨーロッパ旅行によって、日本人が洋画を描くため
には西洋人の気質を体得することが必要と実感し、帰国後の生活を
洋風に一変させました。1926年にはモダンな生活様式を求めて芦
屋へ転居、翌年に洋館のアトリエを構えます。1931年に逝去するま
での約5年間、権重はこの地で裸婦像を中心に数々の傑作を描き、
「裸婦の権重」として歴史に名を残しました。

芦屋へ越してきた当初、権重は温暖な気候と明るい景観を好意的
に受け止め、「南仏ニースの市を中心として、西はカーニュ(中略)東
はモンテカルロと云った風な趣にもよく似通っている」と、かつて訪
れたヨーロッパの風景を重ねていました*1。

しかしこの芦屋の風景は、絵に描くにはいささか困難であったよ
うです。白砂と青い松のコントラストがきつく、建築についても「或る
一軒の家は美しくとも、その両隣がめっちゃなのだ」と、「文化住宅博覧
会」状態であることを嘆いています。いざキャンバスを持って出かけて
みても「その度に何か腹を立て、へとへととなって疲れて帰ってくる」
ことが多かったようです*2。小柄で病弱だった権重は、絵の道具を
抱えて出かけ、屋外で制作することのハードルも高かったでしょう。

このようなジレンマを抱きながら、権重が眺めた芦屋の風景。なぜ
この風景は描く気になったのだろうかと考えながら残された風景画を
見ていくと、権重の風景に対する審美眼をうかがうことができるかもし
れません。

*1、2小出権重「芦屋風景」『美の國』第4巻4号、1928年4月



手前の人物が小出権重。有馬へドライブ旅行の風景。1927年5月。
権重は日常的に洋装で過ごし、余暇には神戸へ出かけコーヒーと洋菓子で一服、自
宅の庭で乗馬をたしなむなどハイカラな生活を送っていた。



現在の風景(前田町)

来月は、権重の芦屋のアトリエで指導を受けた
画家・山崎隆夫が描いた芦屋の風景を紹介します。

問い合わせ 美術博物館 ☎ 38-5432